

# ナミビアの牧畜民ヒンバと 土地のかかわり

その歴史と現在

Land and People:  
the Case of Himba, Pastoral People in Namibia;  
Their History and Present

吉村郊子

YOSHIMURA Satoko

- ①はじめに
- ②ヘレロとヒンバの移動の歴史—他の民族集団やドイツ植民地政府とのかかわりのなかで  
(16世紀なかば～20世紀はじめ)
- ③「ヘッドマン」の創出—おもに南アフリカ政府による統治とのかかわりから(20世紀はじめ～現在)
  - ④ある集団の移住史(19世紀後半～現在)
  - ⑤「われわれの土地」という意識の形成
  - ⑥ヘッドマンの土地か? わたしたちの土地か?
  - ⑦ナミビア独立後のダム建設計画とヒンバの人びと
- ⑧おわりに

## 【論文要旨】

ヒンバはバントゥ系の牧畜民であり、現在はナミビア北西部とアンゴラ南部の国境付近に暮らしている。彼らの居住域のうちナミビア側の地域はカオコランドと呼ばれている。ヒンバと、カオコランドやナミビア中部および隣国ボツアナに暮らすヘレロは、髪型や服装などの外見は大きく異なるものの同じ言語を話し、共通の祖先や社会・文化的な類似点をもつ近い集団として互いを認めている。彼らの祖先は16世紀なかばに今のザンビア南部からアンゴラ南部を経てカオコランドにやってきたとされる。

ヒンバやヘレロの祖先たちは、その後もしばらくはナミビアやアンゴラ、ボツワナなどを含めた広い範囲で移動をくり返していたが、現在ではそうした大きな移動はみられず、とくに今日のナミビアにおいては、人びとは10キロメートルから広くても2,30キロメートル四方のごく狭い範囲で遊動生活をおくっている。そうした彼らの移動の歴史や現在の遊動形態は、他の民族集団によるレイディングやドイツ植民地政府および南アフリカ政府によるナミビア統治の歴史と大きくかかわっている。

本稿では他の民族集団や統治政策とのかかわりからヒンバとヘレロの移動の歴史を整理し、とくに20世紀以降についてはカオコランドのヒンバの暮らしに焦点をあてる。そして、南アフリカ政府が首長制を新たに導入したり人びとの移動を厳しく制限する人種隔離的な政策をとるなかで、ヒンバが現在のような小さな遊動形態をとるに至り、さらにはそれぞれの集団がみずからの居住エリアを「われわれの土地」とであると強く認識して、周辺住民など他者の家畜の侵入や土地資源の利用をつよく排除するようになってきたことを明らかにする。また、南アフリカの統治政策以降、レイディングはなくなったが、現在では住民どうし、あるいはヘッドマンと住民のあいだで土地資源の利用をめぐる対立が起きたり、開発計画をめぐって政府とヒンバが対立するなどの新たな問題が起こっている。本稿ではそうした事例をいくつか示し、それらに関する人びとの対応の様態から、過去の統治政策が現在のヒンバにどのような影響をもたらしたのかを浮き彫りにしつつ、ヒンバと土地のかかわりの変遷と今日の実態を明らかにする。

【キーワード】 ナミビア、ヒンバ（ヘレロ）、土地、植民地統治、開発

## ①……………はじめに

ヒンバはバントゥ系の牧畜民であり、ナミビアの北西部とアンゴラの一部にわたる約3万平方キロメートルの地域に、7千人から1万1千人が暮らしている [Malan 1973 : Crandall 1992]。彼らの居住域のうちナミビア側の地域はカオコランド<sup>(1)</sup> (Kaokoland) と呼ばれている (図1)。

カオコランドはモパネ (*Colophospermum mopane* : マメ科ジャケツイバラ亜科の半落葉樹) の疎開林が広がる半乾燥地域であり、その降雨量は年間100ミリメートルから300ミリメートルにすぎない (写真1)。ナミビア独立直後におこなわれた1991年のセンサスによれば、カオコランドには約2万6千人が暮らしており、その9割以上がヘレロ語を母語とする人-すなわちヘレロとヒンバであった。ヘレロとヒンバは、髪型や服装などの外見は大きく異なるものの、同じ言語を話し、共通の祖先や社会・文化的な類似点を多くもつ近い集団として互いを認めている [Malan 1974 : 太田 1996, 2001]。

カオコランドに暮らすヘレロとヒンバはウシ・ヤギ・ヒツジの牧畜を中心に、雨季に十分な雨が降ったときには小規模ながらトウモロコシなどの栽培を営む (写真2)。彼らは拠点となる家屋敷をもちながらも、季節に応じて家畜とともに遊動生活を送っている。人びとは11月から2、3月ごろまでの雨季のあいだを拠点となる家屋敷「オンガンダ」 (*onganda*, pl. *ozonganda*) で過ごし、やがて乾季になると別の放牧地や水場を求めて家畜キャンプ「オハンボ」 (*ohambo*, pl. *ozohambo*) に移動する。その後はキャンプを転々とさせながら、雨が降り始めるころにはふたたび家屋敷に戻るといふ生活をくり返している。

かつてヘレロやヒンバの人びとは、ナミビア (旧南西アフリカ)<sup>(2)</sup> や隣接するアンゴラ、ボツワナ (旧ベチュワナランド) などを含めた広い範囲のなかで移動をくり返してきた。その移動の歴史は、レイディング (家畜の略奪をおもな目的とした襲撃) など他の民族集団との衝突や、ドイツからの移入者とのかかわり、また、20世紀はじめに起こったドイツ植民地政府との戦い (ドイツ-ヘレロ戦争) などの歴史と大きく関連している。

しかしながら、現在カオコランドに暮らすヘレロやヒンバの人びとが家畜をつれて遊動する範囲は、せいぜい10キロメートルから20キロメートルか、広くても30キロメートル四方におさまるようなごく狭い範囲に限られている。同時に彼らは、みずからが暮らしているエリアの土地は「われわれの土地」であるという意識をつよく抱き、たとえ同じヘレロやヒンバであっても、他のエリアからの移入者をつよく排除しようとすることが多い [吉村 2004]。こうした遊動範囲の大小や土地に対する意識の変化は、他の集団とのかかわりやドイツおよび南アフリカ連邦/共和国 (以下、「南アフリカ」)<sup>(3)</sup> と記述する) によるナミビアの統治の歴史と大きく関連している。とくに20世紀はじめから1990年の独立直前までナミビアの統治にかかわってきた南アフリカ政府の人種隔離的な政策は、ヘレロやヒンバの人びとと土地のかかわりのあり方を大きく変えてきた。

本稿では、まず、他の民族集団などとの関係やナミビアの統治の歴史とのかかわりからヘレロやヒンバの移動の歴史を整理し、とくに南アフリカ政府による統治政策との関連から、人びとが土地に対する意識をどのように変化させてきたかを、その背景とともに明らかにする。さらにナミビアが独立した後、現代のカオコランドで起こっているヒンバの人びとと土地をめぐる問題についていくつかの事例を示し、それに対する人びとの対応の様態から、過去の統治政策が現在のヒンバにど

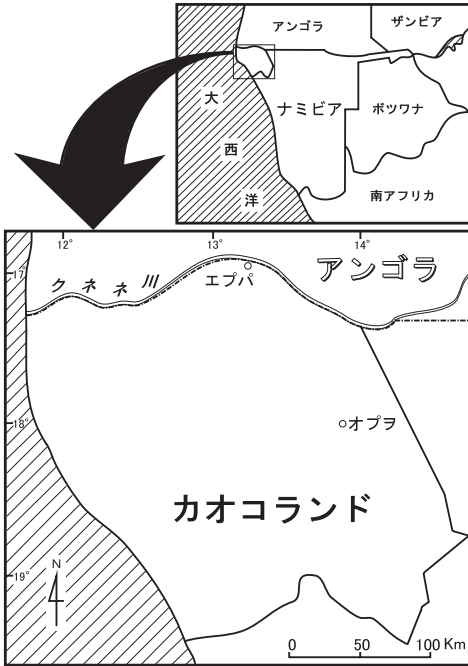


図 1 ナミビア北西部のカオコランド



写真1 カオコランドの風景  
放牧中のウシの向こうに、モパネの疎開林が広がる

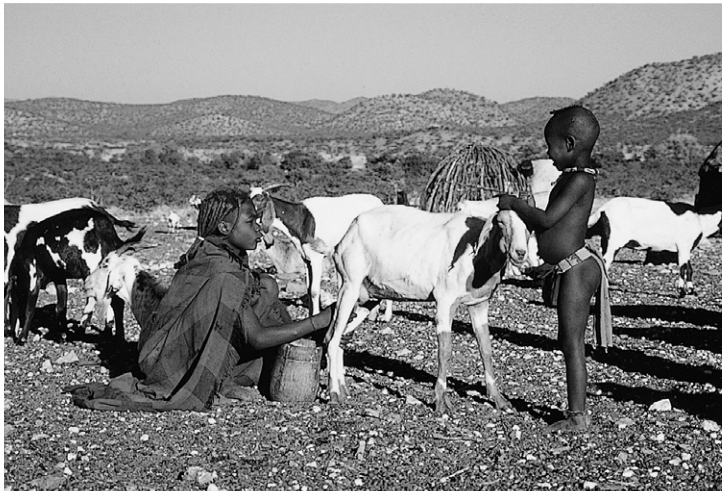


写真2 家畜のミルクを搾ってヨーグルトにしたものや(上), トウモロコシの粉を熱湯に投じてかたく練ったものが(下), ヘレロやヒンバの食事となる

のような影響をもたらしたかを浮き彫りにすることによって、ヒンバと土地のかかわりの変遷と実態を明らかにしてみたい。

なお本稿では、1994年から1998年にカオコランドなどナミビア国内でおこなった現地調査で得た一次資料と、ナミビア国立文書館に保管されていた南アフリカ政府の文書や先行研究を含めたその他の文献資料などの二次資料を用いる。

## ②……………ヘレロとヒンバの移動の歴史

### —他の民族集団やドイツ植民地政府とのかかわりのなかで(16世紀なかば～20世紀はじめ)

ヘレロとヒンバの祖先は、かつて16世紀なかばごろにザンビア南部からアンゴラ南部を経て、



図2 ヘレロやヒンバの人びとの移動  
(16世紀なかば～20世紀はじめ)にかかわるおもな地名の分布

ルアカナ (Ruakana: 以下、この章にでてくるおもな地名の分布については図2を参照のこと) あたりでクネネ川を渡り、現在のナミビアに入ってきたと考えられる [Vedder 1966 : Malan 1974]。今もアンゴラの南部には、ヘレロ語に近い言語を話す別の民族集団が多く暮らしている [Estermann 1981]。

ヘレロとヒンバの祖先は、当初、ルアカナからさら南下してエトージャ・パン (Etosha pan) 北部の平原地帯に進もうとした。ところが、すでに先んじてナミビアに移動していた別の民族集団—オヴァンボの強い抵抗にあって、彼らは西のほうに追われて今のカオコランドにたどり着いた [Bruwer 1966 (Malan 1974に引用)]。

その後18世紀なかごろまでのあいだに、ヘレロとヒンバの祖先たちの一部はナミビア北西部のカオコランドからナミビアの中部へとさらに移動した [Malan 1974]。1791年には、ナミビア中央部 (現

在の首都ウイントフックの辺り) でヘレロの姿をみかけたという報告がある [Vedder 1966]。そして、おおまかにいえば、このときカオコランドに残った人びとの子孫が現在のヒンバであり、ナミビア中部に進出した人びとの子孫が、現在ナミビア中西部などに暮らすヘレロなのである。

しかしながら、19世紀に入るとナミビア中部に暮らしていたヘレロも、カオコランドに暮らしていたヘレロ (現在のヒンバの祖先) も、ともに他の集団からの襲撃を受けるなどして、ふたたび移動を余儀なくされた。

ナミビア中部では、19世紀はじめにヨンカー・アフリカーナー (Jonker Afrikaner: 以後、J. アフリカーナーと記す) をリーダーとするナマ (Nama) の集団が、ギベオン (Gibeon) 北部で放牧していたヘレロをおそって銃殺し、ウシの群れを奪った。J. アフリカーナーはその後もヘレロに対する襲撃をつづけて、1830年にはウイントフックからヘレロの人びとをさらに北に追いやった [Vedder 1938, 1966 : Lau 1987]。このウイントフック周辺の土地をめぐっては、その後もヘレロと



写真3 ヘレロの女性(左)と  
ヒンバの少女(右)



写真4 ヒンバの女性(上), ヒンバの父娘(下)

ナマのあいだでくり返し争いがつづけられることになる。

同じころの1842年には、ドイツからやってきた宣教師カール・フーゴ・ハーン (Carl Hugo Hahn:以後C. H. ハーンと記す) が、南アフリカを經由してナミビア中央のウイントフックにやってきた。やがて彼はウイントフックの北側にあるオシカンゴ (Otjikango) を拠点として、1873年まで布教活動をおこなっている [Lau 1984]。このとき、C. H. ハーンはヘレロ語を学びながら活動をつづけて、一部のヘレロをキリスト教徒に改宗させていった。また今日、ヘレロの女性が身につけている「ビクトリア調」のドレス (写真3) は、C. H. ハーンの子であるエマ・サラ・ハーン (Emma Sarah Hahn) の服装をまねたのがはじまりだといわれており、それ以前は今のヒンバと同じような服装であった (写真4)。

さて、宣教師がやってきた後もヘレロとナマの争いはつづいていた。1850年には、J. アフリカーナーがウイントフックの北にあるオカハンジャ (Okahandja) に暮らすヘレロを襲って多くの人びとを虐殺し、家畜を奪った。また、J. アフリカーナーが1861年に亡くなった後は、その地位を継承したクリスチャン・アフリカーナー (Cristian Afrikaner:以下、C. アフリカーナーと記す) をリーダーとするナマの集団が、1863年にオチンピングウェ (Otjimbingwe) でヘレロの人びとと衝突した。この「オチンピングウェの戦い」でC. アフリカーナーは亡くなり、その地位を彼の兄弟であるヤン・ヨンカー・アフリカーナー (Jan Jonker Afrikaner:以下、J. J. アフリカーナーと記す) が継いだ後も、ナマとヘレロとのあいだではレイディングがくり返された。ただし、J. J. アフリカーナーの時代にはナマの勢力が徐々に衰えてきたために、彼は宣教師のC. H. ハーンにヘレロの人びと

の仲を調停してほしいと願っていた。その結果、ナミビア中部のヘレロとナマの争いは一時的におさまり、1870年代にはナミビア中部にもいっとき平和なときがおとずれた。また、このころにはドイツからの移民がオチンピングウェに最初の居住地を築いており、これは、ヘレロの人びとがキリスト教や洋装だけではなく銃やワゴン、車輪の製造や農業、商業といった新たなモノや営みに触れる機会を多く与えることになった [Vedder 1966]。

しかしながら、こうした平和な時代は長くはつづかず、1880年にはヘレロのリーダーであったマハレロ (Maharero) がナマに家畜を略奪されたことに激怒して、多くのナマを虐殺するというできごとを起こした。このとき、オカハンジャだけで20人から27人のナマが死に至っており、周辺地域を含めると200人近くのナマの人びとが殺されたと推測されている [Pool 1991]。

このように19世紀後半のナミビア中部では、ヘレロとナマのあいだで家畜の略奪や互いの虐殺といった争いがいく度となく、くり返されていた。そして、一方のカオコランドでも同じような争いが起こっていたのである。

当時のカオコランドに関してはナミビア中部についてよりもっと資料が少ないのだが、19世紀なかばごろからやはりナマによるレイディングが起こっていた。とくにナマのなかでもシュバルトブーイ (Swartbooi) とトプナール (Topnaar) という集団の人びとが、カオコランドのすぐ南にあるセスフォンテイン (Sesfontein) に拠点をおいて、その周辺や北部に暮らしていたヘレロ (現在のヒンバの祖先) たちの家畜を略奪しはじめたのである。ナマによる襲撃は、カオコランドだけではなくアンゴラ南部にまで及んでいた [Gibson 1977 : Malan 1974 : Estermann 1981]。

わたしが調査したカオコランド中部の村でも、ある男性 (1908年生まれ) の父や祖父たちはナマのレイディングから逃れるために、19世紀後半にカオコランド中部から北に60キロメートル以上離れた場所に移住していたことがあり、男性自身はそこで生まれたと語っていた (詳細は4章を参照のこと)。このレイディングのときに、ナマの人びとは馬にのって銃をたずさえていたが、男性の父や祖父はまだ銃をもっておらず、ナマに対抗する術がなかった。そのために、彼らはただカオコランドを北上して逃げていくしかなかったという話を父からきいたと、男性は語っていた。

また、ある文献によれば、同じころにカオコランド南西部で一部のヘレロ (現在のヒンバの祖先) の人びとがナマに捕らえられて、セスフォンテインやその付近で主人であるナマのために農作業や放牧に従事させられていたという [Bollig 1997]。また、その他にも、家畜を失ったために一時的に狩猟や採集による生活を余儀なくされたり、さらにはクネネ川を越えてアンゴラ南部にまで移動した人びとがいた [Malan 1974]。こうした人びとは、その後はヘレロではなく異なる名称で呼ばれるようになる。

このころに、カオコランドの東に隣接する地域で暮らしていたオヴァンボや、ナミビア中部に暮らしていたヘレロたちは、カオコランドで狩猟や採集をおこなうようになったヘレロの人びとのことを、「チンバ」 (Tjimba) と呼ぶようになった。この名称は、「オンジンバ」 (*Ondjimba*: 「コアリクイ」の意) というヘレロ語に由来し、「家畜をほとんどもたずに、コアリクイのように地面を掘って生活しなければならなかった貧しい人びと」の姿を表現したものであるといわれている [Vedder 1938, 1966]。一方、アンゴラ南部に逃れたヘレロの人びとは、先にそこで暮らしていたガンブウェ (Ngambwe) という別の民族の人びとに住み処や食べものを「乞う」たといい、それゆえに彼らはヘレロ語で「乞う人」を意味する「ヒンバ」 (*OmuHimba*, pl. *OvaHimba*) の名称で呼ばれるようになった [Vedder 1938 : Malan 1974]。

そのために20世紀前半の文献資料では、とくにカオコランドに暮らすヘレロ由来の人びとに対しては、ヘレロという名称のほかにはチンバやヒンバという名称をあてているものも目だつ [Vedder 1966 : van Walmelo 1962 など]。

現在、カオコランドに暮らす人びとのあいだでは、チンバという名称が日常において表だって用いられることはほとんどなく、<sup>(4)</sup> 多くの人びとは、ヒンバあるいはヘレロのいずれかを自称または他称として用いている。よって、以下の本稿では彼らにならって、18世紀なかばから現在までカオコランドに暮らしつづけているヘレロ由来の人びと(前述のチンバと呼ばれていた人びとを含む)、および19世紀なかばまでカオコランドに暮らした後にアンゴラにわたったヘレロ由来の人びとでヒンバを自称または他称とする人たちのことを、あわせてヒンバと呼ぶことにする。一方で、18世紀なかばまでにカオコランドからナミビア中部に移動していた人びとについては、その後の居住地(ナミビア中部、ボツワナ、カオコランドなど)を問わずに、そのままヘレロと総称することにしたい。

さて、ふたたび19世紀後半のカオコランドやアンゴラに話をもどそう。ナマの襲撃によって家畜を失ったカオコランドの人びとは、先述したようにナマに捕らえられてカオコランドの南で農奴として働いたり、カオコランド中西部の山岳地域に逃げこんで一時的に狩猟や採集によって暮らしをたてたり、あるいはアンゴラ南部のガンブウェのもとに逃れて暮らしていた。ここでは、アンゴラ南部に逃れた人びとについて、もう少し説明を加えておきたい。

アンゴラは16世紀なかばから、ポルトガルの支配をうけるようになった。海岸沿いにはモサメデス(Mocamedes)やポート・アレキサンド(Porto Alexandre)といった交易港や漁港が早くから発達していたが、1830年代にポルトガル系の住人が新たに独立したブラジルからアンゴラに移住したのを機に、1850年代以降、交易網は内陸部やクネネ川の方にまで広がりはじめた。この交易網はカオコランドをまたいでさらに南部のナミビア大西洋岸のヴァルビス・ベイ(Walvis Bay)まで広がり、ヒンバの人びとも象牙やダチョウの羽、家畜などを毛布や衣類、アルコール類と交換するなど交易の一端を担うようになった。また、ポルトガル人たちがハンティングに出かけるときには、その案内人としてヒンバが雇われることも多々あった [Bollig 1997]。

また、当時ハンティングをおこなっていたのはポルトガル人だけではなく、南アフリカから北上してきたオランダ系移民の子孫—アフリカーナー(ブール人)たちは、1880年ごろにはカオコランドを経てアンゴラ南部に入り、そこで農牧業やハンティング、交易活動をはじめていた。このように、ポルトガル人やアフリカーナーのためにハンティングをおこなったりその案内人をつとめたりすることは、当時、アンゴラ南部に逃れていたヒンバにとって重要な労働のひとつであったようである。さらには、ポルトガル政府がクンビ(Nkumbi)やガンブウェ、クワニヤマ(Kwanyama: オヴァンボのなかの一集団)などアンゴラ南部に暮らす他の民族集団を制圧する際に、政府側の傭兵としてヒンバの人びとを雇うことがあった。そこでヒンバの人びとは銃を与えられて、さらには報酬として他の集団から奪った戦利品の家畜などを得たという [Bollig 1997]。

このように、19世紀後半にアンゴラに逃れたヒンバの人びとは、まずガンブウェなど他の民族の居住地に避難して、やがてはポルトガル人やアフリカーナーのもとで交易にかかわったり、さらにはポルトガル政府の傭兵として武装し、今度はガンブウェなど他の民族集団を襲撃する側にもなった。そうしたなかで、ヒンバの人びとはかつてナマに奪われて失った家畜群を徐々に再建していったと思われる。

一方、そのころのナミビアは、1884年からドイツ植民地政府の統治のもとにあった。ドイツ政府の統治政策はナミビア北西端のカオコランドにはそれほど及ばなかったものの、ナミビア中部に暮らすヘレロの人びとにとっては、影響が大きかったようである。ヘレロとドイツの人びとの関係は、先述した宣教師C. H. ハーンや1870年代のドイツ系移民とのあいだにみられた友好的なかかわりだけでは終わらずに、20世紀に入るとヘレロとドイツ政府のあいだで戦争が起きて、そこで多くのヘレロが命を失うことになった。この争いもまた、土地をめぐるできごとに端をほっていた。

ヘレロのリーダーであったサミュエル・マハレロ (Samuel Maharero : 以下、S. マハレロ) は1890年に、それまで彼らが暮らしていた土地の一部の権利をドイツ人に「売った」。このとき、周囲の多くのヘレロから大きな不満の声があがったが、それに対してS. マハレロは売った土地を後にドイツ人から取りもどすことを約束して人びとの不満を鎮めた。そして、1903年末から1904年はじめにかけてドイツ政府軍が他の地域で起こった争いを鎮圧するために先述の土地からはなれた機会をねらって、S. マハレロは約束を実行にうつしたのである。S. マハレロたちはドイツ人のうち宣教師や女性、子どもをのぞいた人びと—おもに農民や商人たちを襲撃して、150人以上を虐殺した。しかしながら、やがて出兵先から戻ってきたドイツ軍の抗戦にあい、ヘレロたちは惨敗を喫することになる。このときドイツ軍によって捕らえられて投獄されたヘレロの数は少なくとも3千人に達し、宣教師たちが提供した三ヶ所のキャンプには、1万2千人のヘレロの人びとが収容された。そして、後者の多くは洗礼を受けた後に、ドイツ系移民の農民や商人のもとで働くことになった。この「ドイツ—ヘレロ戦争」は1907年までつづき、この戦争で多くのヘレロが命を落とし、またある者たちはカオコランドを経てアンゴラに、あるいはボツワナに逃げのびたという [Vedder 1966 : Malan 1974, 1995]。

このときアンゴラに逃れたヘレロの人びとは、先のヒンバと同様にポルトガル政府の傭兵になったのだが、その役割はさほど長くはつづかなかったようである。1910年にポルトガル本国で革命が起きて立憲君主制から共和制に移行すると、アンゴラにおける植民地統治の政策もまた見直されることになった。そして、家畜の略奪が禁止されるようになると、傭兵としてはたっていたヘレロやヒンバの人びとはポルトガル政府と衝突するようになり、政府から独立した集団として数年のあいだアンゴラ南部で他の民族集団に対してレイディングをくり返した後に、1920年ごろまでにはカオコランドに戻ってきたのである [Bollig 1997]。

以上が、20世紀はじめごろまでに、ヘレロやヒンバの人びとが他の民族集団やドイツおよびポルトガル植民地政府とのかかわりのなかでくり返してきた移動の概要である。次の章では、その後のうつり変わりを示すものとして、20世紀のカオコランドに焦点をあてて、人びとと土地のかかわりの変遷を、おもに南アフリカ政府の統治政策とのかかわりからみていくことにしたい。

### ③……………「ヘッドマン」の創出

#### —おもに南アフリカ政府による統治とのかかわりから(20世紀はじめ～現在)

ヴァルメロによれば、ドイツ植民地の時代のカオコランドについては1902年にセスフォンテインにミリタリー・ポストが置かれたものの、カオコランドの住民はその統治の影響をさほどは受けなかったという [van Warmelo 1962]。しかしながら、後にナミビアが南アフリカの統治下におかれるようになると、その様相は大きく変わっていった。



南アフリカは、第一次世界大戦中の1915年には軍をすすめてナミビアを占領している。そして、ドイツが大戦で敗北した後の1920年からは、ナミビアは国際連盟の委任統治領として南アフリカ政府の統治を受けることになった。このとき、住民の物質的・精神的福祉を促進するという委任統治協定にもかかわらず、南アフリカ政府は土地を従来の住民であるヘレロやナマ、オヴァンボたちには返還せず、南アフリカからの白人入植者に農場として与えた〔星・林 1978〕。そして、政府はこうした白人の権益を保護する一方で、1922年の「原住民統治布告」や1925年の「南西アフリカ統治法」の制定によって、「原住民」である「黒人」たちに特定の土地－「居留地」(リザーブ)を割りあてて、彼らの移動を制限する政策をとりはじめたのである〔永原 1997〕。

とくに、20世紀なかばから南アフリカ政府が本国でおしすすめた「アパルトヘイト政策」は、当然その統治下にあったナミビアにも大きな影響を与えた。1962年から翌年にかけて組織されたオデンダール委員会は、ナミビアにおいてはさまざまな「エスニック・グループ」が独自のものとして定着しており、そのアイデンティティは依然として維持されているとの認識にたち、多様なグループを開発の基本単位として承認するような、「区別」の政策を提唱した。この委員会はナミビアの住民を、「黒人」の10のグループに「カラード」、白人を加えた計12の「住民グループ」に分類して、黒人の各グループには「ホームランド」を割りあてる計画をすすめたのである〔永原 1992〕。このとき国土の40パーセントを黒人用、43パーセントを白人用として、さらに鉱物資源が豊富な地域は後者に割りあてた〔星・林 1978〕。この計画は、「オデンダール計画」として1968年から実施されて、カオコランドもこのときに制定された10のホームランドのひとつとなった〔van der Merwe 1983〕。

こうした一連の政策のなかで、南アフリカ政府は各エスニック・グループのなかに「伝統的指導者」(チーフやヘッドマン)を指名して、彼らに対して一定の地域における自治を認める一方で、中央政府に対して協力するように求めてきた。1923年には、カオコランドにおいて先のドイツ政府が認めていた現地の人びと－ヘレロやヒンバたちに対して、南アフリカ政府は一定の土地に対する彼らの権利を確認して、そこで三人のヘレロやヒンバを「チーフ」に指名した〔van Warmelo 1962〕。このときチーフとして名前があがったのは、ヴィタ・トム(Vita Tom)とムホナ・カティティ(Muhona Katiti)、そして、カスピ(Kasupi:別名カクルコイエ Kakurukoye)である。前者のふたりは、かつてアンゴラ南部で家畜の略奪をおこなった後、1917年ごろにカオコランドに戻ってきた各集団のリーダーであった。もうひとりのカスピは、19世紀後半にナマのレイディングにあった後もずっとカオコランドに住みつづけてきた人びとのリーダーであった。

1927年のセンサスによれば、ヴィタ・トムの管轄下には829人が、ムホナ・カティティの下には426人が、カスピの下には378人がいたとされるが、その一方で三人のチーフとつながりのない人が1549人もいた。さらに、先述の数字にはカオコランド南部に暮らす約1200人のヘレロが含まれていないであろうことを考えると、このとき三人のチーフが－いいかえれば三人のチーフをとおして南アフリカ政府が影響力をもちえたのは、カオコランド全体の半分にも満たなかったと思われる〔Bollig 1997〕。しかしながら、その後、南アフリカ政府の統治政策がすすむにつれて、こうした伝統的指導者の数は徐々に増えていった。

1947年から48年にかけてカオコランドで調査したヴァルメロの報告書では、カオコランドにおける13人のヘッドマンの名前が記されており、さらに各ヘッドマンの下には、ひとりから3人のサブ・ヘッドマンがいたことがわかる〔van Warmelo 1962〕。13人のヘッドマンのうちのひとり

先に名前をあげたチーフのひとりの系譜をひく者であり、彼の助言をもとに残り12人のヘッドマンが選定されたという話を、私は後にヒンバの人びとからきいた。また、その12人のヘッドマンのうちのひとり、わたしが調査したエコト村でお世話になった男性の父であった。

そして、1968年から1970年ごろにかけてカオコランドで調査をおこなったマランの論文には、26人のヘッドマンの名前とそれぞれが管轄する地域が記されている [Malan 1974]。先述のオデンダール計画などによる一連の政策が実施された1960年代末から1980年代にかけては、ナミビア全土においてヘッドマンの数が急増したといい [永原 1992]、カオコランドもその例外ではなかったであろう。1968年から1970年当時のリストにあがっている26人のヘッドマンのうちのひとり、先述のエコト村の男性であり、これは父の死後にヘッドマンの地位を継承したのだと彼自身が語っていた。

しかしながら元来、ヘレロやヒンバの社会は「王」や「チーフ」による中央集権的な政治組織をもつてはならず、彼らはリネージ集団を核とした小規模な地縁集団ごとに暮らしているにすぎなかったし、そのつながりもゆるやかに変動しうるようなものであった。よって、多くの家畜をもつ者や弁舌のたつ者などが人びとを助けたり、周りから尊敬されるリーダー的な存在に一時的になることはあっても、その人が圧倒的な権力をもったり、そうしたリーダー的な役割がひとりの人だけに集中したり、継続的な地位として世代を越えて継承されるようなことは、かつてはなかったのである。1990年代なかばにカオコランドで出会ったある男性（1997年当時、70代）は、「ヘッドマンは、『オゾンブル』(ozomburu: ヘレロ語で「白人」や「アフリカーナー」の意) がもってきたもので、祖父のころにはなかった」と語っており、その役割は南アフリカ政府が統治政策のなかでカオコランドにもちこみ、制度化していったものであることを、ヒンバの人びと自身も認識している。

そして、1990年にナミビアが独立した後もヘッドマンの制度はつづいている。1994年の調査当時、カオコランドでは34人のヘッドマン（ヘレロ語では、「オソロマナ」<osoromana>）とひとりのチーフ<sup>(5)</sup>がおり、また、ヘッドマンの下にはそれぞれカウンセラー（ヘレロ語では、「オラタ」<orata>）がふたりずつおかれていた。そして、ヘッドマンごとに管轄地域が設定されていた（以下、これを「村」と呼ぶ）。一般にひとつの村は20キロメートルから30キロメートル四方の広がりをもつ地域であり、そこに200人から300人程度のヒンバやヘレロの人びとが暮らしていた。各ヘッドマンは2ヵ月ごとに300ナミビア・ドル（1996年当時、1ナミビア・ドル=25～27円）の給与を政府から受け取っており、これは彼らの私的な収入となっていたが、各カウンセラーは無給であった。

ここで強調しておきたいことは、19世紀以前にはヒンバの人びとはヘッドマンやチーフといった首長による集権的な組織をもつてはいなかったということである。これまでみてきたように、現

表1 カオコランドにおけるチーフ／ヘッドマン数の推移※

1923年	チーフ	3人
1947 - 48年ごろ	ヘッドマン	13人
1968 - 70年ごろ	ヘッドマン	26人
1994 - 98年	ヘッドマン チーフ	34人 1人

※1923年および1947-48年についてはvan Warmelo 1962を、1968-70年についてはMalan 1974を参照した。また、1994-98年は現地調査で得た資料による。

在カオコランドでみられるヘッドマンの制度やその管轄下にある村というエリアの輪郭は、おもに南アフリカ政府の統治政策のなかで創りだされてきたものであり、ヘッドマンの数やその管轄地域は徐々に増大していった(表1)。このことは、土地に対する人びとの意識や土地の利用そのものにも大きな影響を与えたと考えられる。このことに

については、後の5章以下で詳しくみていくことにする。

また、南アフリカ政府がそれぞれの民族集団に居留地(リザーブ, 1920年代)やホームランド(1960年代)をわりあてて、そこから外への移動を制限する政策をおこなうようになると、以後レイディングはほとんどみられなくなり、今日では皆無となった。

現在、カオコランドに暮らす人びとは、各自が属する村のエリアを基本的な生活領域として、そのなかに拠点となる家屋敷をもっている。そして雨季のあいだはその家屋敷に暮らし、乾季になると家屋敷から数キロメートルあるいは十数キロメートルの範囲(さらに遠くても村のエリア内)において、家畜を連れてキャンプを転々とさせながら遊動し、雨が降りはじめるところにはふたたび家屋敷に戻るという生活をくり返している。

#### ④……………ある集団の移住史(19世紀後半～現在)

2章および3章では、ヒンバやヘレロの移動の歴史をおもに他の民族集団やドイツおよび南アフリカ政府の統治政策とのかかわりから整理し、概観した。この章では、1990年代なかばにカオコランドに暮らしていたある男性と、彼と一緒に暮らしてきた父や父方祖父たちの事例をとりあげて、彼らが実際にどのようなできごとをきっかけとして、どこに移住しながら今日に至ったのかを、もう少し詳しくみておきたい。その内容は、男性(以下、A氏とする)とそのイトコや子どもたちなどの親族が、彼ら自身の経験やA氏の父母あるいは祖父母や彼らのキョウダイなどの年長者たちから語りついできた記憶をもとに話してくれたものである。また、それぞれのできごとが起こった年代は、A氏たちが語った内容とカオコランドにおけるヒンバのクロノグラフィやその他の文献資料の記載内容をすりあわせることによって、推定した。

##### A氏(1908年生まれ)とその父、父方祖父たちの移住(19世紀後半～1930年代後半)

A氏の父方祖父は19世紀なかばごろに、父は1870年代ごろに現在のエコト村あたりの土地(以下、「エコト」と記す。またこの章にでてくるカオコランドのおもな地名の分布については図3を参照のこと)で生まれた。その後19世紀後半には、ナマによるレイディングを逃れるために、彼らは「オムホンガ」(Omuhonga; エコトから北に約60数キロメートル離れた場所)に移住した。A氏は1908年にそこで生まれ、その後には「エタンガ」(Etanga; エコトから西に約10～20キロメートルはなれた場所)を経て、一部の親族をそこにのこして、A氏や父、父方祖父とその妻子たちはエコトに戻ってきた。

そのころ、A氏の父方祖父や父は多くのウシをもっていた。なかにはとてもよいウシがいて、それを「ハルンガ」(Harunga)

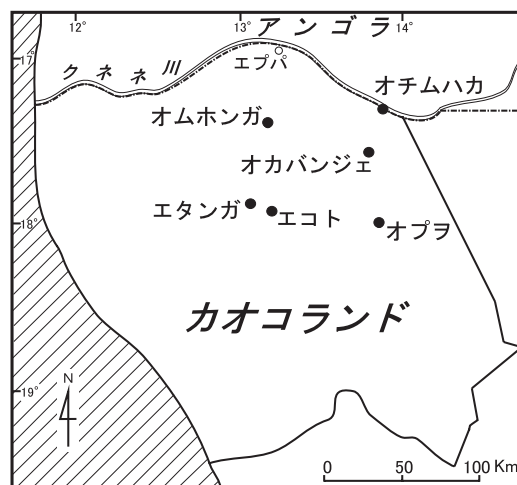


図3 A氏やその父、父方祖父たちの移住に関してでてくる地名の分布

というヘレロが略奪しようと狙っていた。エコトでは一度はハルンガの襲撃をかわすことができたが、その後はさらなる難を逃れるためにA氏と父方祖父および父たちは妻子や家畜を連れて、「オカバンジェ」(Okavandje;エコトから北東に約70km離れた場所)に移住した。A氏の父方祖父は、このオカバンジェで1933年から1934年ごろに亡くなった。その後まもなく、A氏は父や母などとともにエコトに戻ってきた。

ここに出てくるハルンガとは、3章で述べたヴィタ・トムの別名であり、その他にも「オーログ」(Oorlog)などの名でたびたび文献や当時の公文書に登場するヘレロ男性である。彼は、ナマとヘレロやヒンバのあいだでレイディングがあったさなか、1863年に「オチンピングウェ」(現ナミビア中西部の町。図2参照)で生まれた。そして、19世紀後半に父とともにアンゴラに渡り、他のヘレロやヒンバの人びととともにポルトガル植民地政府の傭兵となり、他の民族集団の制圧やレイディングをおこなっていた中心人物である。ハルンガは1916年にはアンゴラからカオコランドに戻り、1937年までそこで暮らしていたという [van Walmelo 1962]。

ハルンガがアンゴラから戻ってきた後にカオコランドで過ごしたのは20年あまりにすぎない。しかし、当時の南アフリカ政府の行政官が作成したレポートをみると、そこにはハルンガともうひとりのチーフであるムホナ・カティティの名前が、その対立の様相とともにたびたび登場する。たとえば、ムホナ・カティティからハルンガに対する苦情を受けて行政官が作成した1917年のレポートでは、ハルンガたちがムホナ・カティティと周囲の人びとのウシを盗み、さらにはその混乱を避けるためにムホナ・カティティたちが一部のウシをアンゴラに移動させようとしたところ、ハルンガが発砲したという事件が記されている [NAN SWAA: A552 Kaokoveld]。

また、これと同じ公文書ファイルに入っていたカオコランド関連の文書のうち、1920年に作成されたレポートには、1916年ごろにムホナ・カティティがエコトの周辺に一時期、滞在していたという記述がでてくる [NAN SWAA: A552 Kaokoveld]。さらにA氏の子どもたちのなかには、ハルンガがアンゴラから帰ってきた後、早魃が起こった年にやはりムホナ・カティティがエコトの近くにやってきて、そこでハルンガと争いになりかけたことがあり、その際に当時エコト付近にいたA氏やその父および父方祖父の親族たちがいかに抗戦したかという話を、A氏やオバたちから聞いたという者もいた。

ヒンバのクロノグラフィによれば、1914～1916年は、食糧がなくなって人びとが皮製の衣類を口にしなければならぬほどの早魃であったとされており、さらに1916～1917年にはムホナ・カティティとオーログ(ハルンガ)のあいだで争いが生じており、それを仲裁するために1917年には行政官がカオコランドにやってきて、争っていたヘレロとヒンバの銃を取りあげたとされている。これらのことから考えると、ハルンガが最初にエコトを襲撃したのは、1916年ごろであったと推察される。

そして、A氏や父方祖父たちがハルンガの襲撃を受けてオカバンジェに移住したのも、この1916年ごろであったのかもしれないが、その確証はない。それでも、ハルンガがカオコランドにいたのが1916年から1937年のあいだであったこと、オカバンジェへの移住はA氏が生まれた1908年以降で彼がまだ結婚していない少年であった—A氏自身のことばを借りれば、1996年の調査当時、彼と一緒に暮らしていた10代前半の少年くらいの背丈で、まだ背が伸びている途中のことであったという話や、そこでA氏の父方祖父が亡くなったのが1933年から1934年ごろであったという話を

考えあわせると、おそらくは1916年から遅くとも1920年代はじめのいずれかの年に、A氏やその父、父方祖父らがオカバンジェに移住したと考えてよいだろう。

#### A氏の父がヘッドマンとなった後に、国境付近で殺される（1930年代後半～1958年）

父方祖父が亡くなった後、A氏とその父はエコトに戻った。1930年代後半にA氏はそこで成人儀礼をおこなって最初の結婚をした。その当時の家屋敷は、A氏たちの今の家屋敷から北西に500メートルほど離れたところにあった。ところが、その家屋敷は川の近くであり水はけがよくなかったために、やがてそこから1キロメートルほど南に離れた場所に新たな家屋敷をつくって移動した。

その後、A氏の父はエコトのヘッドマンとなったが、あるときアンゴラにいる親族を訪ねるためにカオコランドを北上して、クネネ川を越えてアンゴラに渡ろうとしたときに、「オチムハカ」(Otjimuhaka; 国境となるクネネ川沿いの場所)でポルトガル人に捕まり、そこで手に釘を刺しこまれるなどの拷問を受けて殺された。それは1958年のことであった。

オチムハカとは、エプパから上流に向かってクネネ川を80数キロメートルほどさかのぼった地点であり、エコトからは直線距離にして100キロメートルあまり離れている。ここには、1925年に南アフリカ政府の警察ポストが設置されており、そのポストが<sup>(7)</sup>1939年に撤退した後の1958年当時も、ナミビアとアンゴラの国境の要所のひとつであったと思われる。A氏の父を殺したポルトガル人とは、当時のアンゴラを統治していたポルトガル政府が国境付近の警備に配した人ではないかと推察される。

#### A氏がヘッドマンの地位を継ぎ、ナミビア独立闘争を経て現在に至る（1958年直後～現在）

A氏は父の死後、ヘッドマンの地位を継承した。そして、それまで暮らしていた父の家屋敷を出て、そこから北に数百メートル離れた場所に新たに自身が主となる家屋敷をたてて暮らしはじめた。

その後1980年代に入ってナミビア独立闘争<sup>(8)</sup>の戦火の影響がカオコランドにまで大きくおよびようになると、A氏たちはエコトを離れてオプヲの町に一時、避難したが、独立前の1980年代後半に再びエコトに戻ってきた。このときA氏は今の場所に家屋敷をつくり、そこで妻や未婚の子ども、孫たちなどとともに暮らしはじめた。

そして、1997年5月にA氏は亡くなった。その後、ヘッドマンの地位はA氏から彼の息子（第一夫人の長男）に受け継がれて、彼らはその後もエコトに暮らしつづけて現在に至る。

以上のように、A氏たちは過去一世紀半のあいだに、ナマやヘレロによるレイディングから逃れるために、あるいはナミビアの独立をうたっていた南西アフリカ人民機構（SWAPO）と南アフリカ政府軍のあいだで起こった武力闘争の戦火を逃れるために、数十キロメートル以上の地域にわたって移住をくり返していた（表2）。

表2 A氏とその父、父方祖父たちの移住の概要とその経緯

	A氏の父方祖父	A氏の父	A氏
19世紀なかば	エコトで生まれる。		
1870年代ごろ		エコトで生まれる。	
19世紀後半	ナマのレイディングを逃れて、「オムホンガ」(地名 Omuhonga; エコトから北に約60数キロメートル)に移住。		
1908年			(A氏が) オムホンガで生まれる。
1910年代	オムホンガからエタンガを経て、エコトに戻ってくる。		
1916年～20年代はじめ	ハルンガ(人名 Harunga*)からのレイディングを逃れるべく、「オカバンジェ」(地名 Okavandje; エコトから北東に約70キロメートル)に移住。		
1933～34年ごろ	(父方祖父が) オカバンジェで亡くなる。		
1930年代なかば		エコトに戻ってくる。	
1930年代後半			最初の妻と結婚する。
(1930年代後半～)1940年代		(A氏の父が)ヘッドマンに任命される。	
1958年		アンゴラの親族を訪ねる途中、「オチムハカ」(地名 Otjimuhaka; アンゴラ-ナミビア国境)で亡くなる。	
1958年の直後			(A氏が)エコト村のヘッドマンの地位を受け継ぐ。
1980年代			ナミビア独立闘争の戦火を逃れるために、オプワ(地名 Opuwo; エコト村から東に約70キロメートル)に一時、避難する。
1980年代後半			エコト村に戻る。
1997年5月			エコト村で亡くなる。

※ 別名「ヴィタ・トム」(Vita Tom)または「オーログ」(Orlog)として、カオコランド関連の資料にたびたび登場するヘレロの男性。詳細は本文を参照のこと。

ただし彼らは、南アフリカ政府による統治政策が強化されはじめた1930年代以降は、おもに現在のエコト村のエリアに暮らしていた。それは先述したように、南アフリカ政府がヘッドマン制やそれによる土地と住民の管理のしくみを整備し、強化していった時期に重なっており、実際にA氏の父も1930年代後半から1940年代ごろにはヘッドマンに任命されていた。それ以後A氏たちの家族はエコト村の住民として、独立闘争の戦火が激しくなった1980年代の一時期をのぞけば、ずっとエコト村で暮らすことになり、その村のエリア内の狭い範囲で家屋敷を移動したり家畜キャンプを遊動させて、現在に至る。

## ⑤……………「われわれの土地」という意識の形成

現在、カオコランドに暮らす人びとは、各自が属する村を基本的な生活領域としている。そして、村の住人こそがその村のエリア内に家屋敷や家畜キャンプを設営し、そのなかで家畜の放牧をおこない、草木の自然資源や水を利用することができることをつよく認識している。彼らの慣習では、村のエリアの境界を越えて家屋敷や家畜キャンプを築いたり、家畜をつれて放牧したり水場を利用したいときには、新たに入っていく先の村のヘッドマンや住民たちから許可を得なければならないと、人びとは語る。

ところが、わたしがカオコランドで現地調査をおこなった年のうち1995年のおわりから1998年のはじめはとくに雨が少ない年がつづいていたこともあり、村と村の境界を越えて家畜を放牧する人が数多くあらわれたり、家畜キャンプそのものを自身の村から隣村のエリアに勝手に移して一時的にそこで暮らそうとする人が少なくなかった。そのために、わたしが滞在していたエコト村近辺では少ない土地資源－放牧地や水場をめぐる、人びとが争う場面がたくさんみられた。以下にその一例をあげる。

### 隣村からの家畜キャンプの侵入をめぐる

1997年にエコト村の隣村に暮らすある人びとが明らかに村の境界を越えて、家畜を連れてエコト村のエリア内に入り家畜キャンプを設営した。それをみたエコト村の人びとの多くは、「あの放牧地はわれわれエコト村のものだ。勝手に家畜を連れてくるとはけしからん!」、「あそこはわれわれがいずれ家畜キャンプを移動させるつもりであった場所なのに、なぜ隣村の人びとが放牧するのか?」、「あの水場を使うのはわれわれだ。彼らの家畜が水をぜんぶ飲んでしまったら、われわれの家畜が死んでしまうじゃないか!」などと憤りをあらわにした。

エコト村には、侵入してきた隣村の人びとのごく近い親族が嫁いでいた。そのためにエコト村の人びとはまずその親族である女性の夫や息子たちを通じて、やがては直接、侵入者たちにエコト村のエリアから出ていくように伝えた。しかし、隣村からの侵入者はそれには応じず、動くとはしなかった。そうしてまもなく、エコト村の人びとは次のような行動にでた。

エコト村には大きな水場がふたつあり、当時、人も家畜もおもにその水を利用していった。エコト村の人びとは話しあって、毎日、交代で数人ずつが水場に出向いてそこで日中を過ごすことにした。そして、エコト村の家畜が水場に来たときにはそのまま家畜が水を飲むのにまかせていたが、隣村の人びとの家畜がきた際には石を投げて追い払い、家畜に水をのませないようにした。そうしたことを何度かくり返すうちに隣村の人びとはエコト村のエリア内に設営していた家畜キャンプを撤退して、隣村のエリアに戻っていったのである。

この事例からもわかるように、現代のカオコランドに暮らすヒンバの人びとは、村のエリアはそこに暮らす「われわれの土地」という意識をもち、村の住民こそが優先的にそのエリアの土地資源を利用し、ときには利用のあり方について異論をとなえることさえできると考えている。そして、彼らの村のエリアに他からことわりなく家畜キャンプが進入してきたならば、それが隣村の

人でありエコト村に親族を嫁がせているような人のものであったとしても、徹底的に排除したのである。

このように、一定の集団が一定のエリアの土地資源に対して利用や管理の権限をもちうるものであり、そこから他者を排除しようという土地における一種のなわばり意識は、先述した南アフリカ政府の統治政策によってカオコランドにヘッドマンが創出されて、その数が増大するにしたがってカオコランドの土地が30以上の村に細分化されていくなかで、強化されてきたものであると考えられる。

ただし、ここで留意しておきたいのは、ヘッドマン個人が村のエリアに対して優先的な権限をもつわけではないという点である。先のエコト村における事例では、ヘッドマンだけではなくそれ以外の当事者である成人した男女たちや、実際に家畜キャンプの運営にたずさわっていた青年たちも集まって相談し、その対応を決めたものであった。そうした話しあいでは、ヘッドマンだからといってその意見がとくに尊重されるわけではない。このことをさらに顕著にあらわしている事例を、次の章では取りあげる。

## ⑥……………ヘッドマンの土地か?わたしたちの土地か?

1995年の終わりから翌年のはじめにかけての雨季は、カオコランドではごくわずかにしか雨が降らなかった。そのために、カオコランド中部ではトウモロコシなどの作物を栽培できず、1996年の乾季には人びとは栄養源としておもに家畜のミルクにたよらざるをえなかった。ただし、放牧地の草木や水といった資源も決して豊富ではなかったために、人びとは家畜キャンプの移動先にも苦慮していた。そうしたなかで数世帯の家畜キャンプの移動先をめぐって、エコト村で人びとが対立したために、話しあいがおこなわれた。

### ヘッドマンの土地か?わたしたちの土地か?

エコト村に暮らす3人の男性（1996年当時、50～60代）が、家畜キャンプをXと呼ばれる場所に移すことを決めて、移動の準備をはじめた。そのことをきいたヘッドマンは怒りだし、彼らの移動につよく反対した。というのもヘッドマンは、もう少し後に自身の家畜をXに移動させたいと考えていたのだが、もしもその場所に先に他の人びとが移動してしまったならば、彼らの家畜にそこの放牧地の草木を使い果たされてしまうのではないかと心配したのである。しかし、ヘッドマンも3人の男性も互いにゆずらなかつたために、彼らと、さらに他の人びとをまじえて話しあいもたれることになった。

話しあいでは、ヘッドマンは、「エコト村はヘッドマンの土地だ。ヘッドマンが（家畜キャンプの移動時期や場所を）決めることができるのだ」といい、一方の男性3人は、「エコト村はわたしたちみんなの土地であり、ヘッドマンのものではない。だから（各キャンプがどこに/いつ移動するかは）みんなで意見をだして決めることができる」と主張した。その場にいた人のほとんどは、後者の意見を支持することを述べて、「エコト村（のエリア）はわたしたちみんなの土地である」ことを確認し、3人の男性が家畜キャンプをXに移動させることに同意した。



ヘッドマンは、確かに政府から任命されたひとつの社会的な地位ではあるが、村における日常生活では決して絶対的な権限をもつ存在ではないことを、この事例は示している。先述のように、ヘッドマンとは、かつて南アフリカ政府の統治政策によってもたらされた制度であり、それがカオコランドに広がってからまだ半世紀くらいしかたっていない。そのために人びとは、村の土地資源の利用のあり方などを含めて、村で起こった問題はそこに暮らす成人男性たちが集まって（内容によっては女性や青年期の男女も含めて）話しあいの場をもうけて、そこで解決をはかっていた。話しあいでは、先の事例でみたようにヘッドマンだからといってその発言が重視されることはなく、参加者それぞれの意見をすりあわせながら、問題解決の糸口を探っていた。

一方で、ときとしてヘッドマンの存在が大きな意味をもちうることもある。それは、人びとが村の外—他の村や政府と対峙するような問題に出会ったときである。もちろん、問題に際してはヘッドマンのみならず、村の他の人びとも一緒に考え対処するのだが、だれかが村の代表として外に出ていかざるをえないような場合には、ヘッドマンがその代表となっていた。

次の章では、ナミビア独立後に表面化したある開発計画をめぐる、ヒンバの人びとが政府と対峙したときのようすを取りあげる。その問題もまた、ナミビアの統治の歴史と決して無関係なわけではない。

## ⑦……………ナミビア独立後のダム建設計画とヒンバの人びと

わたしは、1994年8月から10月にかけてナミビア中部やカオコランド全域などヘレロやヒンバの人びとが暮らす地域で広域調査をおこなった後に、翌1995年7月から1996年12月、および1997年4月から1998年3月の約2年半のあいだは、おもにカオコランド中部の村で集中的な住みこみ調査をおこなった。それは、カオコランドの北部で水力発電ダムを建設する計画が表面化し、その計画をめぐる議論がナミビア国内外で活発になっていった時期に重なっていた。

カオコランドの北端はクネネ川に接しており、その上流—カオコランド北東部に近いルアカナにはすでに水力発電用のダムがあり、稼働していた。しかし、ナミビアの電力会社はこのルアカナとは別にクネネ川沿いに新しいダムをつくることを以前から模索しており、1990年のナミビア独立後には、その構想は新たに発足したナミビア政府へと引きつがれていった。

1990年代前半にナミビア政府はルアカナのさらに下流に新たなダムを建設する計画を提案し、その実行可能性を探るための調査(フィジビリティ・スタディ)をはじめるとを発表した。これは、計画の初期にダム建設の候補地にあがっていた地域—エプパの名前をとって、「エプパ・ダム計画」(以下、ダム計画と記す)と呼ばれて、やがて広く知られるようになった。

このダム計画については、1994年のはじめにナミビアの首都ウイントフックでワークショップや一般に対する公聴会が開かれていたし、同年中ごろにはエプパでも住民に対する公聴会が開かれた。そして、翌1995年8月21日にナミビア政府はエプパの地においてフィジビリティ・スタディとして現地調査を開始することを宣言し、調査をおこなうコンサルタントの人びとを現地のヒンバたちに紹介する機会をもうけた。

当日、そこには調査をおこなうコンサルタントの代表者や一部のスタッフに加えて、ナミビアおよびアンゴラ両政府の大臣などの関係者や、ナミビアの電力会社の責任者、さらにはクネネ川をはさんで両国側に暮らすヒンバの人びと数十人以上が集まっていた。そして、わたしもそこに同席す

る機会を得た。

まず、政府やコンサルタントの人びとがダム計画に関する調査をはじめると宣言して、それぞれに英語でスピーチをおこなった。彼らは一様に穏やかな顔で、なかには笑みを浮かべながら話す者もいた。ところが、彼らのあいさつが終わった後にエプバ周辺に暮らすヒンバの人びとが応える番になると、その様相は激変した。それまで地面にすわっていたヒンバたちは、順にひとりずつ立ち上がってスピーチしていったのだが、その誰もが大きな憤りをあらわにしながら、ダム計画への反対を表明したのである。ヒンバの人びとは母語であるヘレロ語で語り、それを通訳が英語に訳して他の参加者に伝えていたのだが、あの場に居あわせた者ならば通訳のことばをきかずとも、ヒンバの強い語調やそのけわしい顔をみれば、彼らの意を察することはできたであろう。このときのヒンバの人びとの姿は、カオコランドで調査をはじめたばかりのわたしにとっても、たいへん印象深いものであった。

計画に反対する理由として、ヒンバの人びとは、ダムができると彼らの家屋敷や家畜キャンプ、家畜の放牧地や畑、また川辺にある祖先の墓が水没してしまうことをあげていた。

一方でエプバという場所は、ナミビアの周縁に位置する観光名所のひとつでもあった。そこには「エプバ・フォール」と呼ばれる滝があり、滝の流れの向こう岸に隣国アンゴラの風景を垣間みることができる。また、エプバにつながる道路は、悪路の多いカオコランドのなかでは比較的状態がよく、カオコランドの南部やオプラの町からエプバへのアクセスはさほど難しいものではない。さらに、そこに暮らすヒンバたちの家屋敷を含めて、ナミビアの国内外から個人や団体の観光客が増えつつあった。

こうした状況のもとでダム計画をめぐる議論は、その後、ナミビア国内にとどまらず隣国の南アフリカやヨーロッパの支援団体、さらにはマスメディアなどをもまきこんで大きな話題を呼ぶことになった。1997年にはエプバのエリアを管轄する村のヘッドマンであるヒンバの男性が、ある支援団体の助力を得てヨーロッパを遊説してまわった。そのようすは現地周辺のテレビ映像や新聞紙面などでも取りあげられて、これはダム計画の反対キャンペーンとしてナミビアの国内外で大きなニュースになった。また、ダム計画をめぐるカオコランドやナミビア国内で開かれるミーティングにたびたび出席しなければならなくなった現地のヒンバたちに対して、彼らの移動のためにと、ふたつの支援団体がヘッドマンとひとりのカウンセラーにそれぞれ四輪駆動のトラックを贈った。このようなときには、ヘッドマンはまさにその村のヒンバの人びとの代表として、外の世界－海外の支援団体やマスメディアから、とらえられていた。

さて、実際に当時ナミビア国外からきこえてくる声の多くは、ダム計画に反対するヒンバを支援するものが目立っていた。おそらく、このときナミビアやカオコランドの外からみていた人にとっては、エプバの周辺を拠点として暮らしておりダム計画に反対していたヒンバたちこそが、カオコランドのヒンバそのもの、すべてであるかのように映っていたのではないだろうか。

わたし自身は1995年のエプバでのミーティングを最後に、こうした動きに直接、加わることはなかった。というのも、わたしがその後2年半にわたって住みこんで調査した村は、エプバから南に直線距離にして100キロメートルほど離れた場所にあった。これらの村には、ときおり人づてに伝わってくる「村の外のニュース」として以外には、ダム計画のことが日常の話題にのぼることがほとんどなかったのである。わたしは数ヵ月に一度、カオコランドの町であるオプラや、ナミビアの首都ウィントフックにでかけた際に、町で暮らす友人からダム計画をめぐる動きについていろいろ

ると話をきいたり、新聞その他の報道を目にするだけにすぎなかった。

実際に、当時のカオコランドの住民に限れば、ダム計画について抵抗するにせよ推進を望むにせよ、その行く末に強い関心を抱いていたのはごく一部に過ぎなかったと思われる。それは、エプバ周辺やその下流域に暮らしていたヒンバたちであり、その他にはダム計画にともなう経済の発展などを期待していたオプヲの町の住民の一部や、あるいはエプバから遠く離れた地域に暮らしながらもナミビアの中央政治とのつながりに大きな関心をよせていた一部のヘレロのヘッドマンたちなどであった。その一方で、多数のヘレロやヒンバたちは、わたしが暮らした村の人びとと同じように、ダム計画に対してとくに大きな関心を示そうとはしなかったのである。ヒンバについていえば、実際にダム計画に反対していたのは全体の十分の一以下に過ぎなかったと思われ、多くの人びとはこの問題にまったくといっていいほど関心を寄せていなかった。ダム計画において、カオコランドの多くの人びとの関心のなさは、ナミビア国外におけるマスメディアの報道の過熱ぶりとは対照をなすものであり、とても印象的であった。

わたしが調査したナミビア中部の村の住民のなかには、父や祖父の代に、あるいは幼少時にエプバに近い土地に暮らしていたという者もいたし、クネネ川流域に祖先の墓（たとえばA氏の父の墓など）をもつ者もいた。しかしながら彼らは、エプバ周辺の現在の住民たちのように、祖先の墓が水没の憂き目にあうかもしれないことにも、それほど危機感を抱いてはいなかった<sup>(9)</sup>。

また、ダム計画をめぐる話しあいのなかで、ナミビア政府はエプバ周辺の住民に対して、カオコランドのなかで新たな移住先を提供する考えがあると述べたこともあった。しかしながらそれは、カオコランドの住民にとってはあまり現実味をもたない話であったと思われる。なぜならばカオコランドでは、家畜を飼養するヒンバの居住に適した地域－草木が生育する放牧地や複数の水場を兼ね備えた土地にはすでに他のヘレロやヒンバの人びとが暮らしており、それぞれの土地にはヘッドマンがいて、その管轄下にある村のエリアが設定されて、村の住民こそが優先的にそのエリアの土地資源にアクセスしたり、その利用や管理について采配をふるうことができるという考えが広がっていたからである。

## ⑧……………おわりに

ナミビアのダム計画はナミビア国外でも大きな話題となり、1990年代後半からはエプバ地域に暮らすヒンバの人びとの映像や声が、インターネットやテレビ映像など各種のメディアを通して世界に伝えられた。そうしたなかで、「エプバの自然景観やヒンバの『伝統的』な暮らしを守ろう」という海外からの支援の声が高まり、ダム計画への反対キャンペーンが展開された。

たとえば、オランダの団体が制作したある映像（オフ・ザ・フェンス 2001）は、エプバのダム計画をめぐるドキュメンタリーとして、現地のヒンバの人びとの日常生活やカオコランドおよびウイントフックなどで開催されたミーティングにおける激論のようすに加えて、先述のヘッドマンがヨーロッパを遊説してまわった際の映像などをまとめたものであった。ただし、その内容は明らかにダム計画に反対していたヒンバの人びとの側に寄り添ったものであり、それは、「ナミビア政府が『未開』民族ヒンバの居住地を奪おうとしている」といった印象を与えるような内容に終始していた〔吉村2006〕。また、エプバ周辺に暮らすヒンバの人びとがミーティングで読みあげた声明文を英訳したものやフィジビリティ・スタディの結果の一部が、インターネットなどを通して世界

に公開されたこともあった。こうした海外からのさまざまなかたちの支援は、ダム計画における反対キャンペーンの大きな流れをつくりだし、その後のナミビア政府の判断にも大きな影響を与えたとと思われる。

当時、独立してまもないナミビア政府は海外からさまざまな支援をうけており、またダム計画を実行するためには新たな支援や資金の借り入れが必要であったと思われる。そうしたなかで、先のような海外からの声は、ナミビア政府にとっては決して軽んじることができないものであったと考えられる。そうしてフィジビリティ・スタディが終わった後も、ダムを建設することの是非については未決定のままに、ダム計画は一時中断となつて今日に至る<sup>(10)</sup>。

ダム計画が一時中断となったことは、エプバ周辺に暮らすヒンバの人びとにとっては幸いであつたと思われる。ただ、ダム計画への反対キャンペーンのなかで、とくに海外（南アフリカやヨーロッパ）の支援者たちが掲げていたことば－「ヒンバの『伝統的な』暮らしを守ろう」のうち「伝統的な」という部分には、ややひっかかりを覚える。

彼らの家屋敷や家畜キャンプの素材と構造は、モパネの材と土、牛糞からつくられたごく簡単なものであり、人びとは家屋敷を数年から十年程度の間隔で移動させていたし、家畜キャンプについては数週間からせいぜい1ヵ月単位で今も頻繁に遊動させている。しかしながらその範囲は、この百年のあいだに極端にせまくなっていった。そして、ダム計画の候補地周辺に暮らす人びとが、別の村のエリアに移住することが難しいような状況－ヒンバの人びとが、みずからが暮らす村のエリアを「われわれの土地」として意識し、そこから他者を－たとえそれが同じヒンバやヘレロであつたとしてもつよく排除するような今日の状況をつくりだした要因のなかには、かつてのドイツや南アフリカの政府－とくに後者による統治政策が大きくかかわっていたのである。そうしたなかで、ヒンバの人びとは土地とのかかわりの様態を変化させながら、今日に至つたのである。

カオコランドの人びとは、かつても決して閉じられた世界で暮らしてきたわけではなく、隣接地域に暮らすさまざまな民族集団や、遠くからやってきた他の集団、あるいは植民地政府などのかかわりの歴史のなかで、現在の彼らの暮らしをつくりだしてきたのである。

#### 【謝辞】

本稿で用いた資料の多くは、講談社野間アジア・アフリカ奨学金留学生としてナミビアに滞在させていただいた際に、カオコランドでおこなった現地調査やウイントフックでおこなった資料調査で得たものである。また、その他に平成9年度科学研究費補助金「変容するアフリカ牧畜社会の問題解決にみる内在的論理の人類学的研究」（基盤研究（A）（2）・研究代表者：太田至）の研究協力者としても、調査の機会をいただいた。そして、ナミビア滞在時には、ナミビア大学学際研究センター（社会科学部門）やナミビア国立文書館などの各研究機関や、多くの現地の人びとにお世話になった。とくにカオコランドでは、A氏の家族をはじめとするエコト村の人びとや各所で出会った方たちには、さまざまなことを教えていただくとともに、滞在時のあらゆる場面で助けていただいた。彼らの温かさや寛容さなくしては、ひとりで長期間カオコランドに滞在して調査を遂行することは不可能であつたと思われる。心から感謝の意を表したい。

## 註

(1)——独立後にナミビア政府が新たに行政区画を設定しなおしたために、現在ではカオコランドのエリアはクネネ州オブラ県となっている。調査当時にも、行政による報告書や市販の地図では新しい行政区画名に変更されつつあったが、現地のヒンバやヘレロの人びとはそのままカオコランドという名称を使いつづけていたし、コミュニティ・ランドとして村ごとにヘッドマンや住民たちによる土地の管理・運営がつづいていた。そうした当時の状況をふまえて、また後の章で独立以前の歴史について論じる際に混乱を生じさせないためにも、本稿ではカオコランドという名称を用いることにした。

(2)——現在のナミビアは、19世紀後半からしばらくのあいだは南西アフリカと呼ばれていた。1968年に国連総会で南西アフリカからナミビアへと改称することが決議されたが、その後は南西アフリカ／ナミビアの両方が用いられつつ、ナミビアという呼称も広がっていき、1990年には正式にナミビア共和国として独立を果たした。本稿では混乱を避けるために、時代を問わずナミビア／南西アフリカのエリアを指す際には、ただ「ナミビア」とだけ記すことにする。

(3)——1910年に独立した南アフリカ連邦は1961年に英連邦から脱退して南アフリカ共和国となった。本稿では「南アフリカ」という略称をこの両方にあてて、1961年以前には前者を、以降は後者を指すものとする。

(4)——チンバという名称の由来にこめられた差別的な意味あいゆえに、現在カオコランドの人びとはそれをあまり使いたがらなかった。ただし、実際には人びとはだれがチンバにかかわりがあるかということを知らないわけではなく、そのことがたとえば結婚を決める際に話題にのぼったり、問題になることもある。

(5)——独立後に、ナミビア政府があるヘレロ男性をチーフに任命した。ただし1994～1998年の調査当時にも、そのことがカオコランド住民全体の理解を得て受け入れられているとはいいがたいようにもみうけられた。

(6)——ギブソン [Gibson 1977] の資料を参考に、ナミビア中部で現地のヒンバの人びとから聞きとった内容を付加しながら、およその年や年代を推定した。

(7)——マラリアによる死者が出たために、ナミビア側の警察ポストは1939年に閉鎖されている [van Walmelo 1962]。

(8)——第一次世界大戦後、ナミビア（旧南西アフリカ）は国際連盟の委任統治領として、南アフリカ政府の

統治を受けるようになったが、第二次世界大戦終了後には国際連合（以下、国連と記す）が設立されて、1945年に国連は委任統治制度から信託統治制度への移行を決議した。また、1960年には国連総会にて南アフリカによる委任統治の終了が決議され（決議 2145）、1978年には国連安保理にて「国連ナミビア独立支援グループ」（UNTAG）の設置が決議されたが（決議 435）、南アフリカ政府はこれに応じず、ナミビア住民に対する人種差別的な政策をおし進めた。

そうしたなかで、ナミビア北部に暮らし全人口の約半数をしめていた民族集団オヴァンボの人びとを中心に「南西アフリカ人民機構」（以下、SWAPOと記す）が結成された。SWAPOは1960年代から独立運動を開始し、さらに1966年には武力闘争宣言し、以後1980年代まで南アフリカ政府軍との武力衝突をくり返した。1980年代にはその戦火の影響がカオコランドにもおよびはじめたために、エコト村の人びとは一時オブラなど別の地域へ移住せざるをえなかったという。その後、1988年に南アフリカ政府はナミビアの独立に合意し、翌年の憲法制定議会選挙を経て1990年にナミビア共和国として独立を果たした。

(9)——現在、カオコランドに暮らす人びとにとって重要なのは、今まさに彼らが暮らしている村やその周辺の土地であり、そこから遠く離れた土地については人びとはあまり関心をあらわさない。それは、エプバ周辺に暮らすヒンバの人びとにとっても同じことであり、今、暮らしている土地から追いだされることこそが、彼らが直面している最大の問題なのである。別稿 [吉村 2004] で述べているように、ヒンバの人びとにとっては自らが今、暮らしている土地と自身をつなぎうる祖先の墓こそが重要なのであり、すべての墓が同等に大切なわけではないということを、ここでは確認しておく。

(10)——『ナミビアン (Namibian)』紙 (2008年6月25日付) によれば、2008年6月にナミビアおよびアンゴラ両政府は、エプハの下流に位置するペインズ・マウンテン付近において、水力発電のためのダム建設計画における技術・経済面での実行可能性を探るための調査をおこなうべく、ブラジルの4つの会社と契約を交わしたという。なお、調査にかかわる費用はアンゴラとナミビアがともに負担し、その支払いは調査許可がおりたときにだけなされるという。

---

参考文献

---

- Bollig, M. 1997. Contested places : Graves and graveyard in Himba culture. *Anthropos* 92 : 35-50.
- Bruwer, J. P. van S. 1966. *South West Africa: The disputed land*. Nasionale Boekhandel.
- Crandall, D. P. 1992. *The Ovahimba of Namibia : A study of dual descent and values*. Doctoral thesis in University of Oxford.
- Estermann, C. 1981 (原著は1976). *The ethnography of southwestern Angola III the Herero people*. Translated and edited by G. D. Gibson. Africana publishing company.
- Gibson, G. D. 1977. Himba epochs. *History in Africa*, vol.4: 67-121.
- 星昭・林晃史 1978 『世界現代史13 アフリカ現代史I 総説・南アフリカ』山川出版社.
- Lau, B. 1984. 'Pre-colonial' Namibian historiography: what is to be done?. *Namibia 1884-1984: Readings on Namibia's history and society*. Edited by B. Wood. Namibia Support Committee in co-operation with United Nation Institute for Namibia.
- Lau, B. 1987. *Namibia in Jonker Afrikaner's Time: Windhoek archives publication series No.8*. National Archives of Namibia.
- Malan, J. S. 1973 Double descent among the Himba of South West Africa. *Chimbebasia* (B) 2-3: 81-112.
- Malan, J. S. 1974 : The Herero-speaking peoples of Kaokoland. *Chimbebasia* (B) 2-4: 113-129.
- Malan, J.S. 1995 *People of Namibia*. Rhino Publishers.
- Merwe, J. H. van D. 1983. *National atlas of South West Africa*. Institute for cartographic analysis, University of Stellenbosch.
- NAN SWA Administration A552 Kaokoveld (Storage Unit: 2516, File No.:A552/22, Name of file: Major Manning Report v2, 1917-24). ナミビア国立文書館蔵。
- 永原陽子 1992 「アパルトヘイトと『エスニシティ』 - ナミビアの歴史から考える」 『歴史科学と教育』 11: 20-44.
- 永原陽子 1997 「現代ナミビアにおける『伝統的権威』 - マンドゥメの死からクワニャマ王国の復活へ」 林晃史編『南部アフリカ民主化後の課題』 アジア経済研究所: 175-204.
- オフ・ザ・フェンス 2001 『母なる大地に生きて - アフリカ・ヒンバ族の闘い (映像)』 オランダ.
- 太田至 1996 「ナミビア北西部のカオコランドに住むヘレロとヒンバのエスニック・バウンダリーの動態」 『アフリカ研究』 48: 115-131.
- 太田至 2001 「『われわれ』意識の乖離と重なり - ナミビアにおけるヒンバとヘレロの民族間関係」 和田正平編『現代アフリカの民族間関係』 明石書店: 164-187.
- Pool, G. 1991. *Samuel Maharero*. Gamsberg Macmillan.
- Vedder 1938. *South West Africa in early times: Being the story of South West Africa up to the date of Maharero's death in 1890*. Hendrich Vedder, Ph.D. translated and edited by Cytill G. Hall, LL.D. Oxford University Press.
- Vedder, H. 1966 (初版1928). The Herero. In C.H.L.Hahn, H. Vedder and L. Fourie (eds.), *The Native Tribes of South West Africa*. Frank Cass & Co. Ltd., London. pp.153-211.
- Walmelo, N. J. van, 1962 (初版1951). *Notes on the Kaokoveld (South West Africa) and its people*. The Government Printer. Pretoria.
- 吉村郊子 2004 「土地と人をつなぐもの - ナミビアの牧畜民ヒンバにとっての墓」 田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至編『遊動民(ノマッド) - アフリカの原野に生きる』 昭和堂: 439-464.
- 吉村郊子 2006 「伝える力 - ことばやふるまいが文字化・映像化されるということ -」 『歴博』 134: 15-19.

(国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系)

(2007年11月30日受理, 2008年7月29日審査終了)

---

## **Land and People : the Case of Himba, Pastoral People in Namibia ; Their History and Present**

YOSHIMURA Satoko

Himba and Herero are bantu-speaking pastoral people of southern Africa. Although today they differ considerably in appearance, including features such as hairstyle and clothing, they speak the same language and recognize each other as closely related groups sharing same ancestors and social/cultural similarities. According to their oral history and literature, their ancestors came to south-western Namibia from northward, through southern Zambia and southern Angola, in the mid-16th century. Some of them had gone as far as central Namibia by the mid-18th century. Till the beginning of 20th century the some ancestors of Himba and Herero used to move far, for example some of them moved from the area of Namibia to Angola or Botswana for escaping with their life from raiding by other ethnic groups or the war with German colonial government.

Today Himba live north-western Namibia and south-western Angola. Many Herero live in central Namibia, some live in north-western Namibia and also in Botswana. In the case of Namibia they usually lead a small nomadic life which people repeat to move only at close distance seasonally and/or occasionally.

In this article, I have organized the history of Himba and Herero's migration in reference to their relations with other ethnic groups and some policies when Namibia was under German or South African rules; and for the period following the 20th century, I have focused especially on the case of Himba in Kaokoland. There I shall clarify the process through which the Himba came to lead a small nomadic life in such a small area as they do today. I shall also explain how they came to strongly recognize their dwelling area as their land which its habitants have priority over other area's people on its use and management.

Since the South African mandatory day, which government severely restricted native people's migration, there is no raiding between ethnic groups but other problems have arisen, including conflicts over land resources among inhabitants, or those happening between the government and some Himba people over development plans. With pointing out such incidents and referring to the way in which people responded to them, I shall explain about the influence of past governance policies on the present Himba's life and view of the history of the relationship between Himba and land.

Key words: Namibia, Himba and Herero, land, colonial day, development

---